

令和2年産 美里地区の大豆情報



第1号 令和2年4月15日

宮城県美里農業改良普及センター

TEL:0229-32-3115

FAX:0229-32-2225

<http://www.pref.miyagi.jp/site/misato-index/>

1 令和元年産大豆について(JA新みやぎみどりの地区本部 大豆検査実績より)

○管内の実績

表 品種別播種面積

	タチナガハ	ミヤギシロメ	タンレイ	その他	みどりの全体
播種面積(ha)	1,183	370	15	4	1,573
割合(%)	75.2	23.5	1.0	0.3	100

表 品種別実績

	タチナガハ	ミヤギシロメ	タンレイ	その他	みどりの全体
生産量(袋:30kg)	64,739	17,624	617	1,064	86,679
反収(kg/10a)	164	143	123	-	193
1等級割合(%)	46.4	63.6	8.8	-	64.4

注) 台風19号の被害で刈倒したほ場(約120ha)や収穫後未調整となった被害大豆(約50t)のほ場の面積を含むため反収については参考値。

☆作柄に影響した要因

【標播】

- ・6月下旬～7月の低温・寡照により生育は抑制されたが、その後は高温傾向となったため、後期の生育量の増加は平年より多く、成熟期の総節数は平年を上回った。タンレイ及びミヤギシロメは開花期～着莢期に少雨となったが着莢節数及び有効莢数は平年を上回った。子実肥大期は高温・多照傾向で推移したことにより百粒重も平年並～上回り、子実重は平年を上回った。タチナガハは徒長傾向で着莢節数及び有効莢数は平年並となったが、百粒重が大きく、子実重は平年を上回った。
- ・外観品質は、タチナガハで未熟粒が多く、粒形や粒大、色などのばらつきも大きかった。この要因は過繁茂による受光体勢の悪化などにより子実の成熟のばらつきが大きくなったことが考えられた。ミヤギシロメでは子実肥大期の高温・多照傾向により、粒揃いが良く平年より良好であった。

【晩播】

- ・播種後～7月下旬までは低温・寡照傾向で、生育量は平年をやや下回ったが、8月前半の高温・多照により生育は回復し、成熟期の総節数は平年を上回った。着莢節数及び有効莢数も平年を上回り、子実重は平年を上回った。
- ・外観品質は標播と同様に平年より良好であった。

2 令和2年産に向けて

(1) ほ場の準備

①排水対策 排水性の良いほ場をつくり、適期作業につなげましょう。

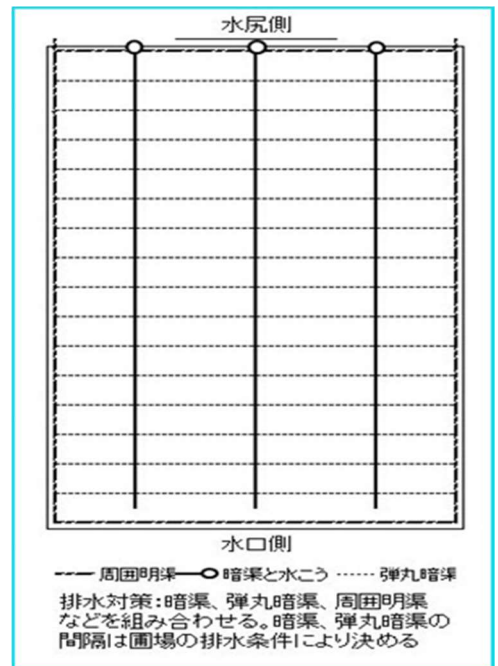
排水性が悪いと根が張らず、大豆の養水分の吸収が阻害されてしまいます。暗渠や明渠、補助暗渠等を組み合わせ、適切な排水対策を行いましょう。明渠を掘る場合には、確実に排水口につなぎ、停滞水がスムーズに排出されるようにしましょう。

○地表排水…額縁明きよ、基幹明きよ

明きよは、10～30m間隔、深さ20～30cmで施工します。排水の悪いほ場では、間隔を5m以内とします。確実に排水溝につなぐようにしましょう。

○地下排水…本暗きよ、補助暗きよ（弾丸暗きよ）

弾丸暗きよは、本暗きよと直交するように2～3m間隔で、地表から40cmの位置に施工します。



②土づくり 有機物・石灰・リン酸を施用しましょう

大豆は地力を消耗する作物です。作付け頻度が高くなると地力が消耗し、低収や小粒化の原因となります。また、土壌の酸度(pH)が適正值(pH6.0～6.5)より低いことや、リン酸、石灰分等の不足が低収の要因となることもあるので、適切な土づくりと施肥管理が重要です。

大豆が吸収する窒素の多くを根粒菌による窒素固定に頼っていることから、大豆の増収には、根粒菌の着生と活性の維持も重要なポイントとなります。根粒菌の着生には、リン酸や塩基が多く、土壌酸度が微酸性～中性(pH6.0～6.5)で腐植に富んだ土壌が適しています。

③施肥（基肥量の目安）

栽培様式	播種期	基肥成分量(kg/10a)		
		窒素	リン酸	加里
標播	5月下旬～6月上旬	1.5～2	5～6	6～8
晩播	6月中旬～7月上旬			
晩播(麦後)	6月中旬～7月上旬	2～3	6～9	8～12

※麦稈をすき込む場合

(2) 播種 各品種の特性に合わせ、適期に播種しましょう

品種名	栽培様式	播種期	播種量	播種様式		栽植本数 (本/10a)
			(kg/10a)	条間	株間	
タチナガハ	標播	5月下旬～6月上旬	3.3～4.4	75～80cm	20～25cm	10,000～13,300
ミヤギシロメ	標播	5月下旬～6月上旬	3.8～5.1	75～80cm	20～25cm	10,000～13,300
あやこがね	標播	5月下旬～6月上旬	3.1～4.1	75～80cm	20～25cm	10,000～13,300
		6月中旬～6月下旬	4.1～5.9	70～75cm	15～20cm	13,300～19,000
	晩播	7月上旬	5.5～5.9	70～75cm	15cm	17,800～19,000
タンレイ	標播	5月下旬～6月上旬	3.6～3.9	75～80cm	20cm	12,500～13,300
	晩播	6月中旬～7月上旬	5.2～8.3	70～75cm	10～15cm	17,800～28,500

(3) 中耕・培土

梅雨時期にあたるので、計画的に作業を実施しましょう

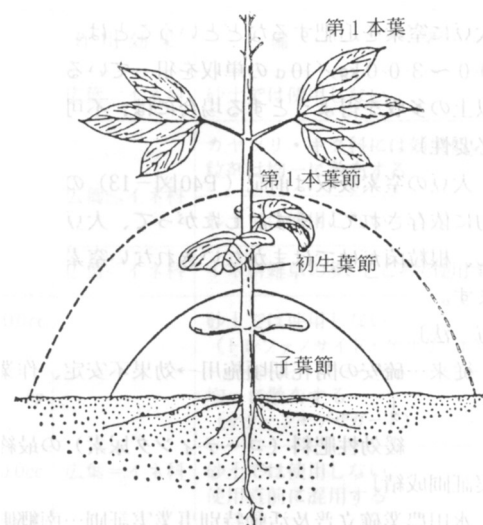


図 中耕培土の目安

普通栽培

- 1 回目：本葉 2～3 葉期に子葉節が隠れる高さまで
- 2 回目：6～7 葉期に初生葉が隠れる高さまで

晩播栽培（麦後）

- 本葉 5～6 葉期に子葉節が隠れる程度の高さまで

※不定根の発生による生育促進，増収，倒伏防止，土壤通気性・排水性の改善，除草等の効果があります。

※遅い時期の中耕・培土は，主茎や分枝の損傷，断根により生育に支障を来すため，開花の 10 日前までには終えるようにしましょう。

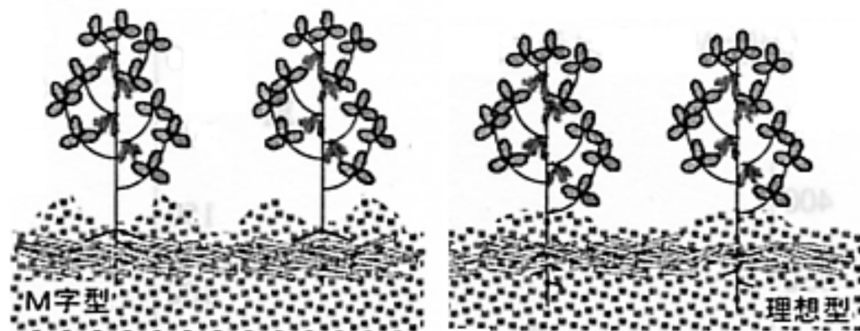


図 中耕培土の模式図

※株元に土が寄らないM字型培土は逆に生育に悪影響となることがありますので，作業機の調整・速度に注意しましょう。

(4) 雑草防除

雑草対策の第一は大豆の生育を良好にすることです

<一般的な防除体系>

大豆播種	大豆 2～3 葉期	大豆 6～7 葉期
------	-----------	-----------

土壤処理剤 → 茎葉処理剤 → 中耕培土 → 中耕培土

※大豆バサグラン液剤の処理適期は「大豆 3 葉期」です。

アサガオ類などの難防除雑草は「大豆 2 葉期」に防除します。

<土壤処理剤について>

土壤表面の碎土率が高く，かつ，適度に湿り気のある条件で処理することで，除草効果が安定します。碎土率を高めるように努めましょう。

出芽している雑草には効果が劣るので，播種後間を開けずに散布することが重要です。

◇◇◇◇◇ 令和2年春の農作業安全確認運動実施中 ◇◇◇◇◇

実施期間

令和2年3月1日～令和2年5月31日

重点推進テーマ

「見直そう！農業機械作業の安全対策」



令和2年 全国農作業安全確認運動 農林水産省

＜草種ごとの対策＞

草種	対策
広葉+ヒエ	大豆バサグラン液剤+ポルトフロアブル
ツユクサ, クサネム	バサグランが効きづらいので, 中耕培土や非選択制除草剤の畦間・株間散布を組合わせて対応する。
雑草少発生	中耕培土で対応する。



シロザ



ツユクサ



クサネム

草種	対策
タデ類, キク科 (アメリカセンダングサ, オナモミ等), アブラナ科, イチビ	効果の高い大豆バサグラン液剤の散布。



タデ



イチビ



アメリカセンダングサ

草種	対策
ホソアオゲイトウ, イヌホオズキ	葉齢が大きくなると大豆バサグラン液剤の効果が低下する。発生時は, 大豆バサグラン液剤散布早限 (大豆2葉期) に達したら即散布する。残草した場合は, つり下げノズルによる畦間・株間処理で対応する。



イヌホオズキ



ホソアオゲイトウ



茎葉処理剤の処理時期の目安 (除草効果等の詳細は, 宮城県「普及に移す技術」第94号を参照)

	アタックショット乳剤	大豆バサグラン液剤
シロザ	4葉・5cmまで	2葉・3cmまで (中)
ホソアオゲイトウ	6葉・10cmまで	3葉・3cmまで (中)
イヌホオズキ	10cmまで	6葉・5cmまで (中)
オオイヌタデ	2葉・3cmまで	15cmまで (高)
アメリカセンダングサ	—	20cmまで (高)
オオオナモミ	4葉・10cmまで	6葉・15cmまで (中～高)
アレチウリ	5葉・つる化前まで	5葉・つる化前まで (中)
マメアサガオ	4葉・つる化始まで	3葉・つる化前まで (中)
アメリカアサガオ	2葉まで	2葉まで (低)
イチビ	6葉・15cmまで	6葉・15cmまで (高)
クサネム	1葉・2cmまで	—
ツユクサ	—	—

注) 大豆バサグラン液剤欄の () は, 低日照時の除草効果の安定性を示す。

草種	対策
帰化アサガオ類 アレチウリ	3~4葉期までであれば効果があるが、つるが発生してしまうと、それ以降に大豆バサグラン液剤を散布しても効かない。発生時は大豆バサグラン液剤散布早限(大豆2葉期)に達したら即散布する。残草は、つり下げノズルによる畦間・株間処理で対応する。



<難防除雑草の防除体系>

近年発生が増えているアレチウリや帰化アサガオ類は出芽後 2~4 週間でつるになり、大豆につるが絡みついて防除が非常に困難となる雑草です。基本的にはほ場外からの浸入や持ち込みにより発生が始まるので、少発生のうちに防除することが重要です。

ほ場内で全面発生してしまうと土壤中に多量の雑草種子が混入してしまい、大豆の生育期間中に次々と発生してくるため、大豆の草高が条間と同じ長さに育つ(被陰効果により雑草の多くが生育できなくなる目安の時期)まで、何度も防除(除草剤、中耕培土)を行う必要があります。

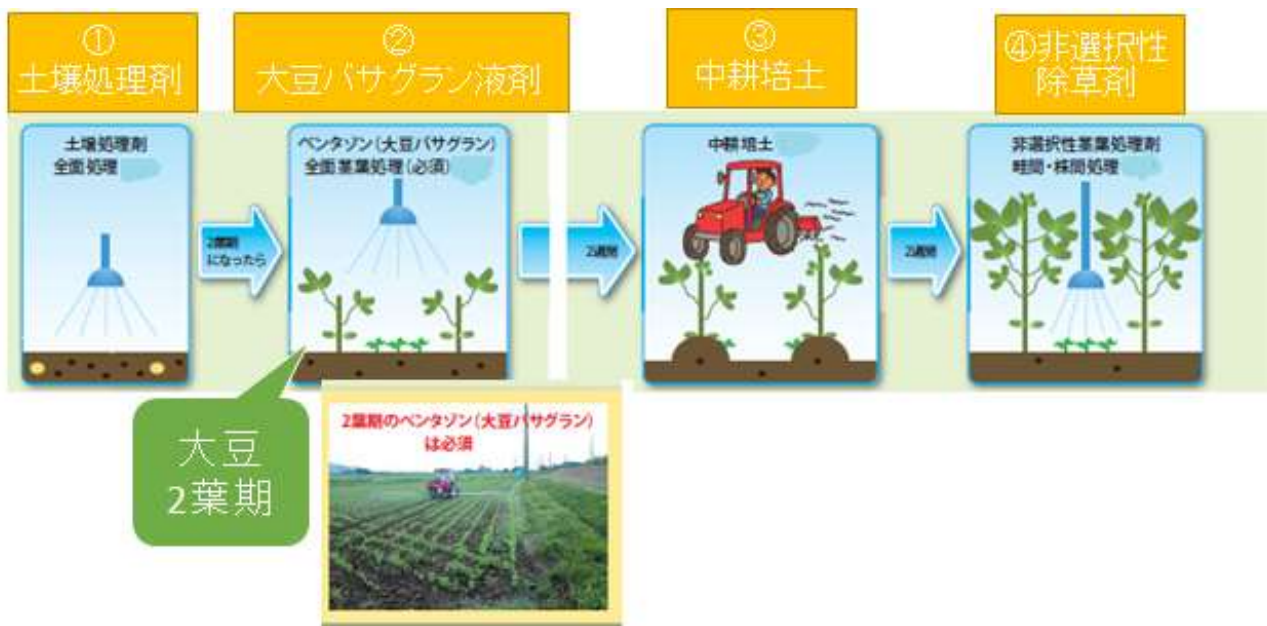


図 帰化アサガオの防除体系(農研機構 「帰化アサガオ類まん延防止技術マニュアル」より)

(5) 播種前から生育初期の病害虫防除

紫斑病, 茎疫病, 黒根腐病, アブラムシ類, フタスジヒメハムシ, タネバエ等の病害虫が前年に多発生した場合には, 病害虫に適用のある種子消毒剤を使用しましょう。

記載している農業情報は, 令和2年4月8日現在のものです。使用に当たっては, 最新の登録情報を確認の上, 周辺の他作物への飛散等に十分注意してください。